

# 日本東北地域出土のスンベチルゲ(剥片尖頭器)の研究 —製作技法、型式、大きさ、年代を中心に—

李 起吉

朝鮮大学校史学科教授

(日本語訳／洪惠媛)

## On Tanged Points of Japanese Tohoku Region from Korean Perspective

- Technique, typology, dimensions and chronology -

Gi-kil Lee

Department of History, Chosun University, 309 Pilmundae-ro, Dong-gu, Gwangju, 501-759, Republic of Korea <klee@chosun.ac.kr>

**Abstract:** Typical tanged points had been unearthed from a number of sites in Tohoku region. Although minor differences like dimensions and ratio of tang's part are found, the tanged points from Tohoku region were manufactured in the same technique as those of Korean Peninsula. On the basis of AMS C-14 dates, AT tephra and lithic assemblage, the duration of tanged points in Tohoku region was from 32,190±140 BP to late Upper Palaeolithic. Therefore the appearance and distribution of tanged point in Japanese Archipelago is much earlier and broader as far as recognition.

**Key words :** Tohoku, tanged point, manufacture technique, duration, distribution.

### 1. はじめに

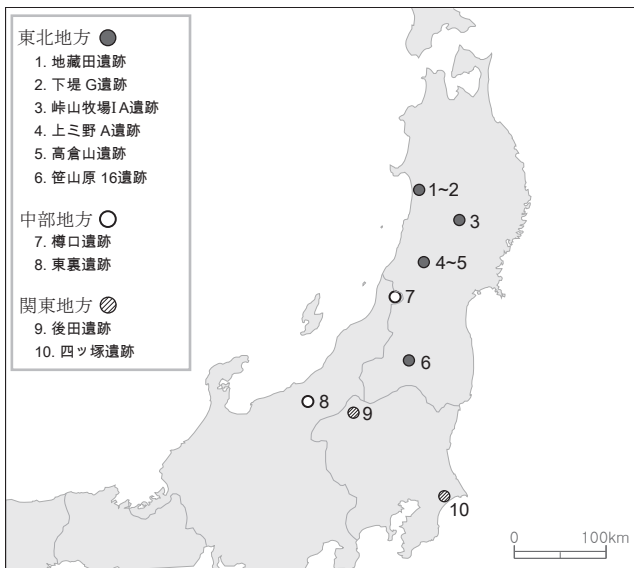
後期旧石器時代の日本列島と韓半島の文化交流を明らかにすることにおいてスンベチルゲ(日本学界の剥片尖頭器)は1980年代後半から多くの研究者達の重要な研究対象として注目されてきた(松藤1987、Matsufuji K 2004、佐藤1992、清水2000、2010、木崎2005、張龍俊2007、安蒜2005、2013)。彼らの研究の要点は、佐藤宏之を除いて、スンベチルゲ(剥片尖頭器)が日本列島で始めて作られたものではなく、韓半島から九州地域に伝播されたということである。

しかし、スンベチルゲ(剥片尖頭器)の比較研究において重要な出発点である概念の定義と型式分類を見てみると、研究者ごとにその違いがみられる(清水1973、稲原1986、吉留2002、李隆助・孔秀眞2002、張龍俊2007、李起吉2011a)。特に、韓国学界でスンベチルゲ(剥片尖頭器)として分類されるもののなかで、日本学界では基部加工や二側縁加工ナイフに該当するものもある。また、日本学界で

ナイフ形石器として分類するもののなかに、韓国学界でスンベチルゲ(剥片尖頭器)として分類されるものもある(木崎1988、張龍俊2010、李起吉2011b)。したがって、両地域の遺物を客観的に比較するためには、前提条件として明確な一つの基準が提示される必要がある。

筆者は、スンベチルゲ(剥片尖頭器)の型式を大きく3種類に、さらに11種類に細分したが、この中では日本の学界で基部加工及び二側縁加工ナイフ形石器として分類されたものが含まれている(李起吉2011a)。そのようなナイフ形石器と区別するため、この論文ではスンベチルゲ(剥片尖頭器)を筆者の分類案で、〈凹型「가(ga)」〉型式に限定する。これは清水のⅠ～Ⅲ型式(清水1973)、木崎のB1型式(木崎1988)、吉留のⅠ～ⅢのA、B型式(吉留2002)、張龍俊のⅠ～Ⅲ型式(張龍俊2007)とほぼ同類である。

最近までに東北日本で調査された遺跡のなかで、ナイフ形石器、ペン先形ナイフ形石器、基部整形石器、または基部整形剥片尖頭器が出土した場所として、福島県笹山原



第 1 図 東日本の剥片尖頭器出土遺跡

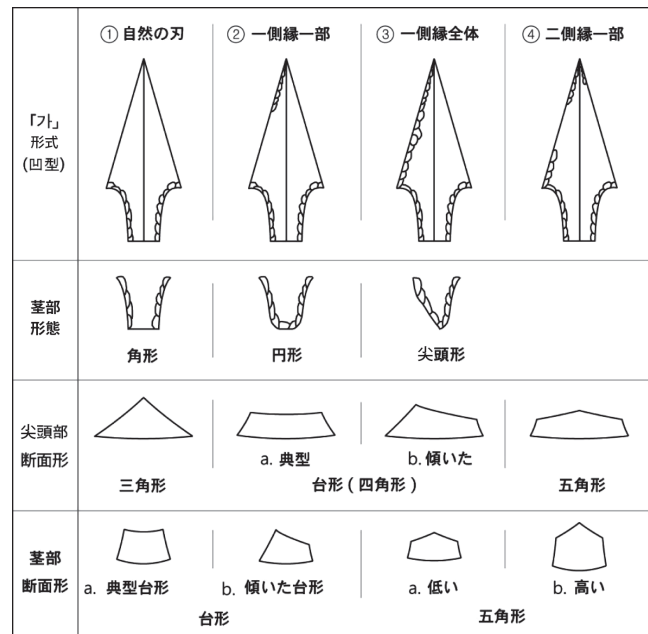
No.16 遺跡、山形県上ミ野 A 遺跡と高倉山遺跡、秋田県地藏田遺跡と下堤 G 遺跡、岩手県峠山牧場 I 遺跡 A 地区等があげられる (第 1 図)。本稿では、その遺物中に、前述した「ガ」型式のスンベチルゲ (剥片尖頭器) として分類されるものを提示し、製作技法、型式、大きさと重さ、茎の長さの比率などを分析する。さらに、筆者は韓国ジングヌル遺跡のスンベチルゲ (剥片尖頭器) と比較して、日本東北地域の剥片尖頭器の存続年代について検討する。

## II. 東北地域の剥片尖頭器

ここに用いたスンベチルゲ (剥片尖頭器) の型式分類 (第 2 図) は、筆者が「ガ」形式で 4 つの亜型式に分類した方法で、尖頭部と茎部の横断面、さらに茎部の形態などもその基準に基づいている (李起吉 2011a)。資料については、上ミ野 A 遺跡 (羽石ほか 2004、傳田ほか 2012)、峠山牧場 I 遺跡 A 地区 (高橋・菊池 1999) の報告書を引用した。高倉山遺跡 (佐野ほか 2013) は論文を、地藏田遺跡 (安田・神田 2011)、下堤 G 遺跡 (安田ほか 2013) については、秋田市教育委員会文化振興室のホームページで公開された資料を使用した。また、笹山原 No.16 遺跡の資料の大きさと重さについては、発掘担当者である會田容弘氏から御教示をいただいた。

### 1. 笹山原 No.16 遺跡

笹山原 No.16 遺跡の第 11・12 次発掘調査において、凝灰質頁岩で石器を製作した第 4 石器集中区域が検出された。旧石器遺物は基本層序の第 3 層、第 4a 層、第 4b 層から約 2000 点が出土した。基部整形石器、基部整形剥片尖頭器、



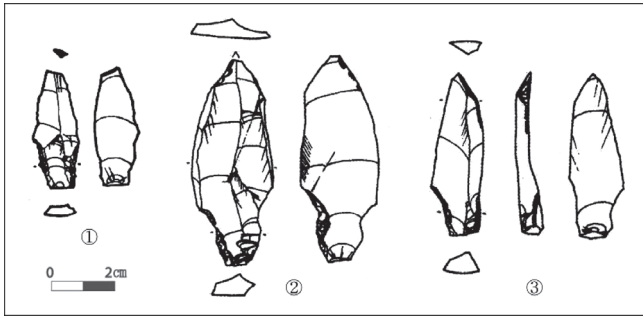
第 2 図 スンベチルゲの型式と横断面の分類

エンドスクレイパー、石核、石刃、ハンマーなどが図面として提示されている。そして、旧石器時代の包含層の第 4b 層から検出された炭化物は、AMS 法による放射性炭素年代で、 $32,190 \pm 140$  BP、 $30,510 \pm 120$  BP、 $29,000 \pm 100$  BP、 $28,920 \pm 100$  BP と報告された (會田 2011, 2012a, 2012b)。ここで基部整形石器と基部整形剥片尖頭器と報告された遺物について検討してみよう (第 3 図)。

① 石器の尖頭部の部分が少し折れた状態にある。素材は単設打面の石核から生産された石刃で、平面形態が狭くて長い三角形を呈する。基部の背面側を両側辺加工して茎を製作している。その横断面が台形で、茎部の形態は角形をしている。一方、尖頭部は二次加工されない第一次剥離面であり、横断面が二等辺三角形を呈している。これはガ①型式に属する。長さ 36.4mm、幅 13.6mm、厚さ 4.2mm、重さ 1.6g である。茎部の長さの比率は全体の 0.42 の値より小さい。

② 素材は単設打面の石核から剥離された小型石刃である。基部の背面側を両側辺加工して茎を製作し、その横断面が不規則な五角形である。茎の先端部は円形を呈する。一方、尖頭部は左側辺の一部が背面側に加工され、右側が第一次剥離のままである。横断面は薄い五角形であり、ガ②型式に属する。長さ 64.0mm、幅 26.0mm、厚さ 5.5mm、重さ 8.6g である。茎部の長さの比率は全体の 0.37 である。

③ 単設打面の石核から剥離された小型石刃の基部に、背面側の両側辺を加工して、茎が製作されている。その横断面は傾斜する台形で、茎の先端部は角形を呈する。一方、尖頭部は右側一部の背面側が加工され、左側辺が第一次剥離面のままである。その縦断面は三角形である。ガ②型式



第3図 笹山原 No.16 遺跡の剥片尖頭器

に属する。長さ 50.4mm、幅 18.9mm、厚さ 6.7mm、重さは 3.9g である。茎部の長さの比率は全体の 0.30 である。

## 2. 上ミ野 A 遺跡

1986 年の試掘調査以後、1987 年、1991 年、2000 年にかけて 3 回の発掘調査が行われた。A 群と B 群に区分される二つの石器群が第 3a、b 層から出土した。A 群は西南日本の特徴をもつ石器を有し、石刃技法以外の技術基盤を伴っている。B 群は東北日本の特徴的な石器を有する、石刃技法に技術基盤を置いた「東山系石刃石器群」である。一方、第 3b 層の下部から AT が確認されており、A 群から検出された炭化物を測定した放射性炭素年代は  $23,230 \pm 80$  BP である(羽石ほか 2004、傳田ほか 2012)。ここで、A 石器群と B 石器群の出土したナイフ形石器として分類された、

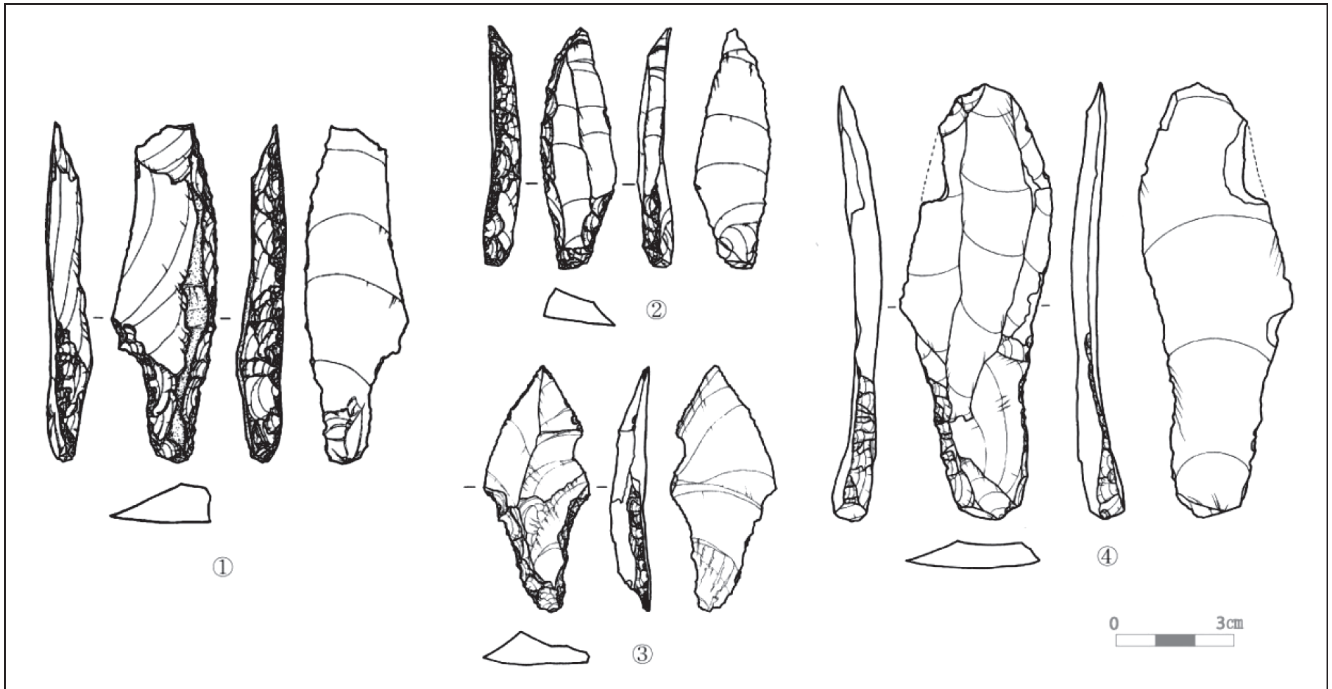
剥片尖頭器を紹介する(第 4 図)。これらの石材は全部が珪質頁岩である。

① 中型の縦長剥片を選択し、一側縁は基部の周辺だけ背面側を加工して凹形に成形している。もう一つの側縁は全体がやや凸形の弧状に背面側を加工し、茎部と尖頭部が区分される。茎部の形態は円形を呈する。茎部と尖頭部の横断面は台形と傾斜した台形である。ガ③型式に属する。長さ 84.3mm、幅 25.6mm、厚さ 10.3mm で、重さ 20.9g である。茎部の長さの比率は全体の 0.34 である。

② 単設打面の石核から剥離された小型の石刃を選択し、一側縁は基部側だけに、もう一つの側縁が全体にかけて背面側を加工し、茎部と尖頭部を区分できるように製作されている。茎部の形態は四角形である。茎部と尖頭部の横断面は台形であるが、尖頭部は片方の傾斜が急で、他方が鋭角である。ガ③型式に属する。長さ 60.0mm、幅 18.7mm、厚さ 7.3mm で、重さ 8.6g である。茎部の長さの比率は全体の 0.33 である。

③ 先端が鋭い小型の縦長剥片を選択し、基部の背面側を両側辺加工して茎部を製作している。先端部の尖った両側には、使用痕と思われる刃こぼれが見られる。尖頭部と茎部の横断面はそれぞれ三角形と傾斜した台形である。ガ①型式に属する。長さは 60.8mm、幅 26.0mm、厚さ 9.0mm で、重さ 9.1g である。茎部の長さの比率は全体 0.46 である。

④ 大型の縦長剥片の基部の両側辺を背面側に加工して茎部を製作している。尖頭部は、縦長剥片末端部の背面側の左側縁一部に加工が施されており、それにより、尖頭部を



第4図 上ミ野 A 遺跡の剥片尖頭器

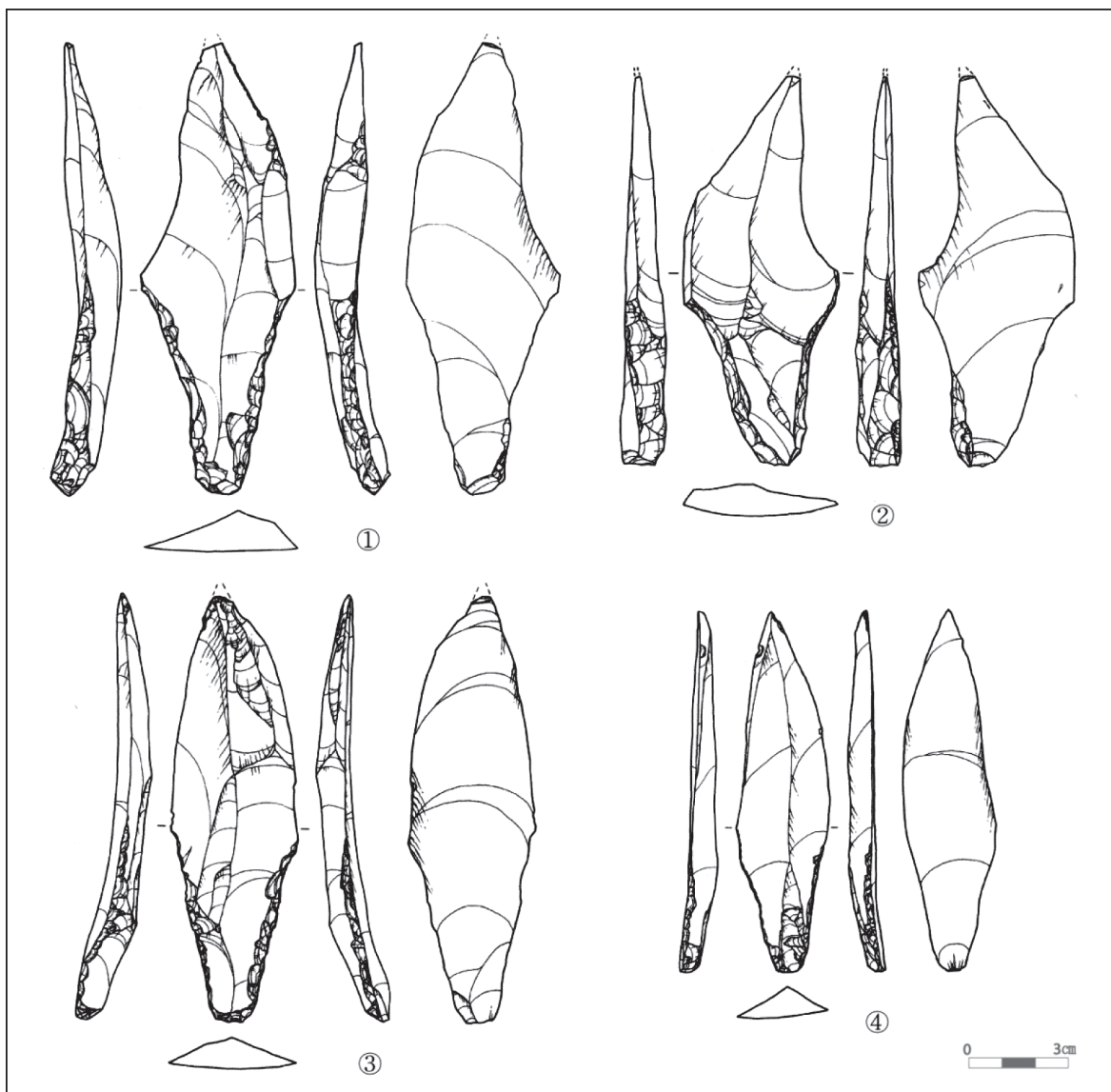
もつ刃部側が左右対称近くに、成形されている。茎部末端の形態は円形を呈し、尖頭部の横断面が台形である。ガ②型式に属する。長さ 109.8mm、幅 37.6mm、厚さ 9.0mmで、重さ 28.7g である。茎の長さの比率は全体の 0.35 である。

### 3. 高倉山遺跡

2010～2012年に3回の発掘調査がおこなわれた。6層に分けられる堆積層中、第1a層から3層にかけて旧石器が出土しているが、特に、第2層下部と第3層から多数の石器と焼けた礫が出土した。これらは「東山系石器群」に属し、ナイフ形石器とエンドスクレイパーの比率が高い。そして、彫刻刀形石器とそのスポールが接合する例や剥片および石核を調整する剥片類はほとんど無い。チップ類が多く出土

したことから道具の整形加工と刃部再生などの作業があったと推定される。特に、ナイフ形石器の中には、衝撃剥離の痕跡が多く残されており、遺跡の性格を狩猟具、または狩猟具の刺された狩猟物を持ち帰った住居址や狩猟場として推定している（佐野ほか 2011、2012、2013）。ナイフ形石器と報告された遺物中に、剥片尖頭器に属する例を紹介する（第5図）。これらは全て珪質頁岩で製作されている。

① 大型の縦長剥片を選択し、まず基部の腹面側に折り取っている。その後、背面側を加工し、両縁側の凹んだ茎部が製作された。末端部の形態は円形を呈する。尖頭部は背面に右側縁の一部を加工し、弧状にしている。先端部は一部折れた状態にある。尖頭部と茎部の横断面は三角に近い台形と低い五角形である。ガ②型式に属する。長さ 133.4mm、



第5図 高倉山遺跡の剥片尖頭器

幅 45.7mm、厚さ 12.7mm、重さ 55.6g である。茎の長さの比率は全体の 0.47 である。

② 大型の縦長剥片を選択し、基部を腹面側に折り取っている。その後、背面側に二次加工を施して両側を凹形にし、末端部の形態を円形の茎部として仕上げている。尖頭部と茎部の横断面は三角に近い低い台形と、低い五角形を呈する。ガ①型式に属する。長さ 115.1mm、幅 46.3mm、厚さ 10.0mm、重さ 40.2g である。茎の長さの比率は全体の 0.5 である。

③ 素材は両設打面の石核から生産された大型の石刃である。基部の両側辺を背面側に加工して茎部を製作し、鋭い尖頭部も背面側の加工によって製作されている。茎部の末端形態は円形を呈し、尖頭部と茎部の横断面形はそれぞれ二等辺三角形と低い五角形である。ガ②型式に属する。長さ 126.0mm、幅 37.6mm、厚さ 10.4mm で、重さ 42.2g である。茎の長さの比率は全体の 0.46 である。

④ 素材は単設打面の石核から剥離された大型の石刃である。基部の両側辺を背面側に加工して茎部を製作し、先端部は背面側の右側辺一部に加工し、尖頭部が作られている。ガ②型式に属する。長さ 106.3mm、幅 26.7mm、厚さ 8.7mm で、重さ 19.9g である。茎の長さの比率は全体の 0.38 である。

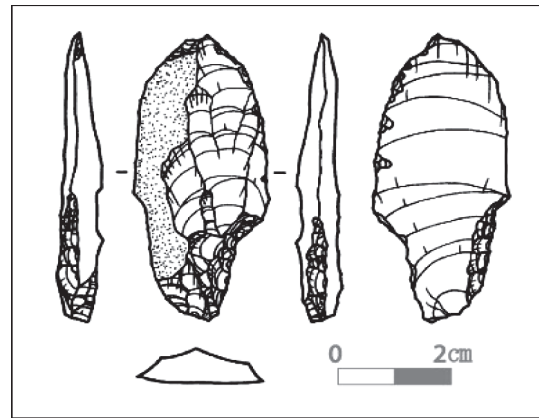
#### 4. 地藏田遺跡

1985 年秋田新都市開発整備事業を契機に発掘された。15 層に区分された地層中に、第 IVa、b 層から旧石器時代のブロックが 14 カ所、4,447 点の旧石器が発見された。石器群は磨製石器、ナイフ形石器、ペン先形ナイフ形石器、台形様石器、スクレイパー、エンドスクレイパー、ノッチ、鋸歯縁石器、石核、剥片、チップなどが組成する。明確な石刃技法は見られない。石器と共に検出された炭化物が年代測定され、AMS C-14 年代は  $29,720 \pm 130$  BP、 $28,080 \pm 120$  BP であった(安田・神田 2011)。ペン先形ナイフ形石器として報告された石器を剥片尖頭器として分類する。石材は珪質頁岩である(第 6 図)。

① 縦長剥片の基部を観察すると、腹面側は右位を加工し、背面側が右位と基部側を二次加工し、茎を製作している。茎部の末端は円形を呈する。横断面は五角形である。剥片の先端部は刃こぼれが観察される。これはリタッチとするより、むしろ使用によるものと思われる。尖頭部の横断面は五角形である。ガ①型式に属する。長さ 52.3mm、幅 24.1mm、厚さ 7.8mm で、重さ 6.8g である。茎の長さの比率は全体の 0.4 である。

#### 5. 下堤 G 遺跡

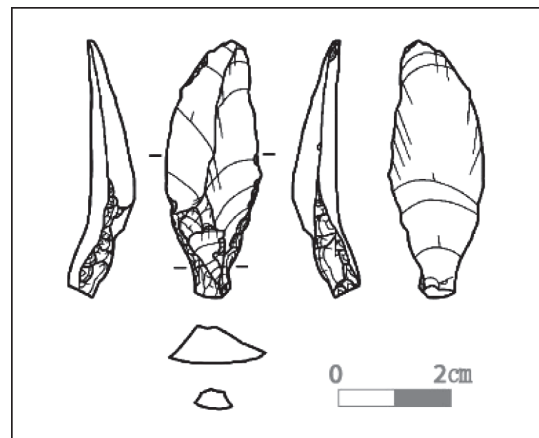
地藏田遺跡と同じように、1982 年秋田新都市開発整備事業を契機に発掘された。12 層に区分される地層中、石器出土層位の主体は第 IVa、b 層である。石器は 872 点で、ナイフ形石器、台形様石器、石刃、スクレイパー、エンドスクレイパー、石核、剥片、チップなどが組成する。特に、当



第 6 図 地藏田遺跡の剥片尖頭器

石器群には米ヶ森技法で製作された剥片と石核が含まれている。石器群の特徴から「後期旧石器時代前半期の後半段階」として編年される(安田ほか 2013)。ナイフ形石器として報告されたものに、剥片尖頭器として分類できるものがある。石材は珪質頁岩である(第 7 図)。

① 小型石刃の両側辺を背面側に加工し、茎部を製作している。茎の末端部は四角形を呈し、横断面が五角形である。先端に近い左側辺の一部にも背面側に加工が施されている。尖頭部の横断面は部位によって三角形と台形を呈する。ガ②型式に属する。長さ 44.5mm、幅 16.5mm、厚さ 10.1mm で、重さ 3.6g である。茎の長さの比率は全体の 0.43 である。



第 7 図 下堤 G 遺跡の剥片尖頭器

#### 6. 峠山牧場 I 遺跡 A 地区

1993 ~ 94 年に東北横断自動車道秋田線建設と関連して 2 回発掘された。全部で 7 枚の旧石器文化層が確認されており、第 5 文化層に属する 18 ブロックからナイフ形石器、彫刻刀、エンドスクレイパー、スクレイパー、槍先形尖頭器、石刃核などが出土した。この文化層は第 II a 層上部に位置し、AT 層より上位に堆積する。湧別技法による細石刃石核

が出土する第6文化層より下位にある。この層は、荒屋型彫刻刀形石器を包含しておらず、後期旧石器時代の後半期として編年されている(高橋・菊池 1999)。この18ブロックでナイフ形石器として報告されたものに、剥片尖頭器として分類されるのが少なくとも11点存在するが、その中の完形する石器を紹介する(第8図)。これらの石材は全て硬質の凝灰質泥岩である。

① 両設打面の石核から剥離された石刃が素材として選択されている。基部の両側を背面側に加工して茎部が製作されている。茎の末端部は角形を呈し、横断面が台形である。先端部は背面側の左側一部を加工し、尖頭部を作っている。横断面は台形である。ガ②型式に属する。長さ69.5mm、幅19.0mm、厚さ7.5mm、重さ6.0gである。茎の長さの比率は全体の0.38である。

② 素材は両設打面石核から剥離された石刃である。基部の両側辺を背面側に加工して茎部が製作されている。茎の末端部は角形を呈する。横断面は五角形である。先端部は左側と右側一部を背面側に加工し、平面が三角形になっている。横断面は三角形に近い。ガ④型式に属する。長さ88.0mm、幅29.0mm、厚さ10.0mmで、重さ17.1gである。茎の長さの比率は全体の0.41である。

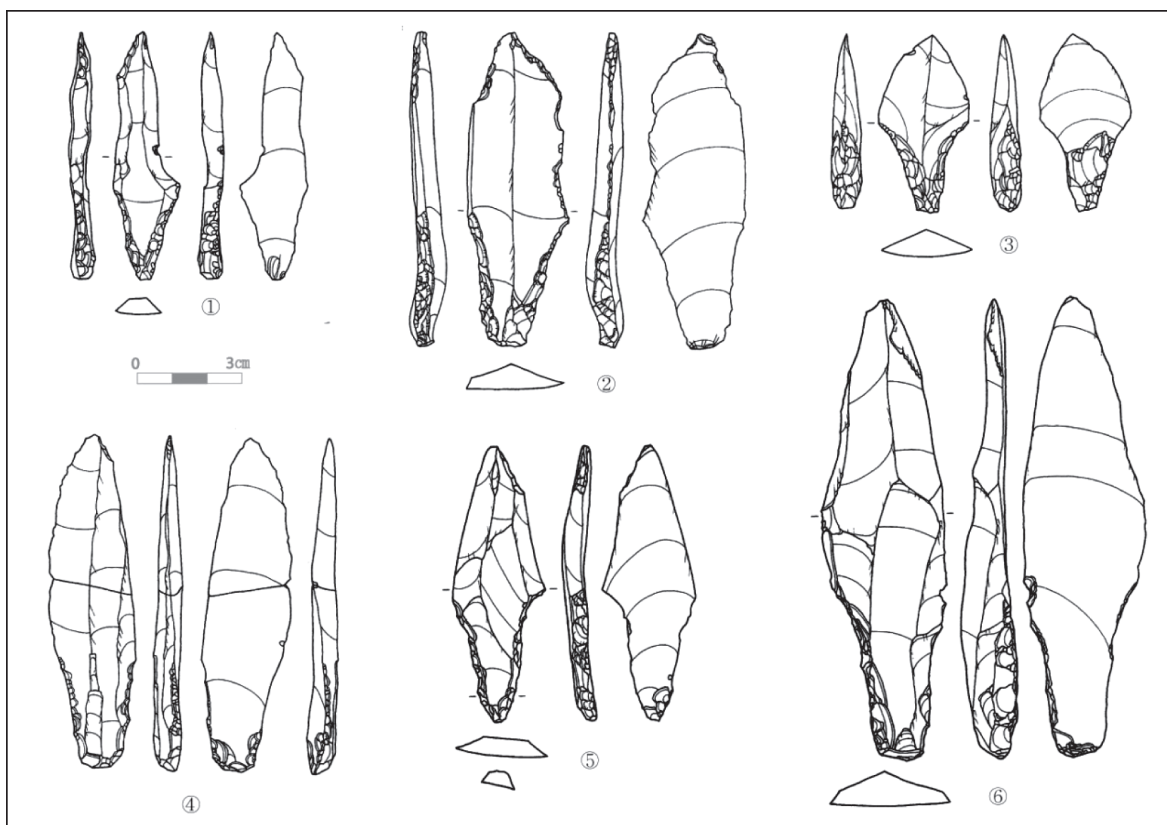
③ 両設打面の石核から生産された石刃を素材として選ん

でいる。基部の両側辺を背面側に加工している。基部は凸形を呈し、腹面側を面的に加工して平坦な茎部になっている。茎の末端部は角形を呈する。横断面は三角形に近い。尖頭部は未加工のままの刃部である。横断面が二等辺三角形である。ガ①型式に属する。長さ50.0mm、幅26.0mm、厚さ9.0mm、重さ6.7gである。茎の長さの比率は全体の0.5である。

④ 素材は両設打面石核から剥離された石刃である。基部の両側辺を背面側に加工し、茎部は腹面側の打面部を除去した状態がみられる。茎の末端部は円形を呈する。横断面は五角以上ある。先端部は背面の右側一部を加工して尖頭部を作っている。尖頭部の横断面は三角形である。ガ②型式に属する。長さ93.0mm、幅25.0mm、厚さ8.0mmで、重さ11.4gである。茎の長さの比率は全体の0.34である。

⑤ 素材は両設打面の石核から剥離した石刃である。基部の両側辺を背面側に加工し、腹面も一部加工して茎部を製作している。茎の末端部は尖頭形を呈する。横断面は台形である。先端部は背面の右側一部を加工し、平面を三角形のような尖頭部を製作している。横断面は台形である。ガ②型式に属する。長さ77.0mm、幅26.0mm、厚さ9.0mmで、重さ10.3gである。茎の長さの比率は全体の0.47である。

⑥ 素材として両設打面の石核から剥離した石刃が選択されている。基部の両側辺を背面側に加工している。腹面側



第8図 峠山牧場I遺跡A地区の剥片尖頭器

の茎も加工されており、打面は除去されている。茎の末端部は角形を呈する。横断面が台形である。尖頭部は未加工のままである。横断面は部位によって左右対称の三角形と五角形である。ガ①型式に属する。長さ 129.0mm、幅 35.0mm、厚さ 15.0mm、重さ 43.9g である。茎の長さの比率は全体の 0.35 である。

### III. 考察

#### 1. 製作技法

前述したように剥片尖頭器の石材は凝灰質頁岩、珪質頁岩、硬質凝灰質泥岩に分けられるが、珪質頁岩は 4 カ所の遺跡で、他の石材は各々 1 カ所の遺跡で選択されている。この石材はいずれも粒子が細かく、硬くて、等方向性を持ち、大型・小型の剥片や石刃を生産し、精巧な道具を製作するのに適合している。韓半島でもこのような性質の流紋岩、ホルンフェルス、珪質頁岩などがスンベチルゲ (剥片尖頭器) の石材として用いられた。

素材の種類は石刃と縦長剥片があるが、石刃の比率が非常に高い。石刃の場合、単設打面の石核よりは両設打面の石核から生産されたものがはるかに多い。遺跡別で見ると、笹山原 No.16 遺跡、下堤 G 遺跡、地蔵田遺跡では全て単設打面の石核から剥離した石刃、上ミ野 A 遺跡では単設打面の石核から剥離した石刃と縦長剥片、および両設打面の石核から剥離した石刃、高倉山遺跡と峠山牧場 I 遺跡 A 地区は全てが両設打面の石核から剥離した石刃や縦長剥片が利用されている。

二次加工技術に対しては、まず加工された面を見ると、茎部の場合、背面側におこなわれる二次加工が 14 点 (73.7%)、背面側と腹面側の二次加工が一緒に施された場合は 5 点 (26.3%) ある。そして、尖頭部は全部が背面側に二次加工されている。各部位の二次加工された面が背面側に多くなされるのは、この道具が刺すことや、着柄することに効率性を高めるため、横断面が三角形や台形を志向したことに密接な関連があったと考えられる。そして、二次加工が施された範囲は茎部に限られたのが 6 点 (31.6%)、茎部および尖頭部の一部に施されたのが 10 点 (52.6%)、茎部および尖頭部の一側縁全体が 2 点 (10.5%)、茎部および尖頭部の両側に施されたのが 1 点 (5.3%) である。この構成比は、最低限の二次加工をほどこして完成する剥片尖頭器の比率が非常に高かったことを示している。製作技法に見られるような特徴は韓国の垂楊介遺跡、龍山洞遺跡、ジングナル遺跡などで報告されたスンベチルゲ (剥片尖頭器) に共通する。

#### 2. 大きさ、重さと茎の比率

次に、大きさと重さ、そして茎の長さの比率を整理してみると次のようになる。

長さと幅を第 1 表でみると、笹山原 No.16 遺跡、下堤 G 遺跡、地蔵田遺跡の剥片尖頭器は小さい範囲に属し、峠山牧場 I 遺跡 A 地区の場合は小さい範囲～最も大きい範囲に、上ミ野 A 遺跡は大きい範囲に、そして、高倉山遺跡は最も大きい範囲に属する (第 9 図)。

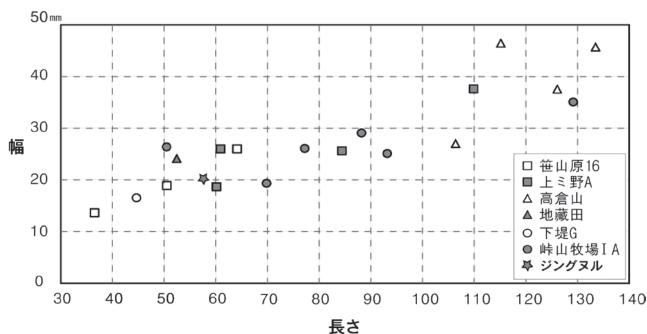
ここで長さをジングナル遺跡と比較してみると、笹山原 No.16 遺跡、下堤 G 遺跡、そして地蔵田遺跡はジングナル遺跡の最小と最大範囲に含まれるが、上ミ野 A 遺跡と峠山牧場 I 遺跡 A 地区では半数がその範囲に含まれ、残りの半数はそれ以上である。高倉山遺跡では全部がそれ以上である。幅や厚さの平均値を比較した場合、傾向はほぼ同じである。重さを比較するとその差はさらに明らかである (第 10 図)。このように東北日本出土の剥片尖頭器の中には韓半島と類似する資料も多いが、さらに大きい石器もかなり含まれている。そして、全体の長さに対する茎部の長さの比率をジングナル遺跡の平均値と比較してみると、笹山原 No.16 遺跡と上ミ野 A 遺跡は類似するか、または、もっと大きい方に含まれる。しかしながら、峠山牧場 I 遺跡 A 地区、高倉山遺跡の方はさらに大きい。このように茎部の比率が大きい点は韓半島とは区別され、東北地域の特徴として考えられる (第 11 図)。

#### 3. 型式

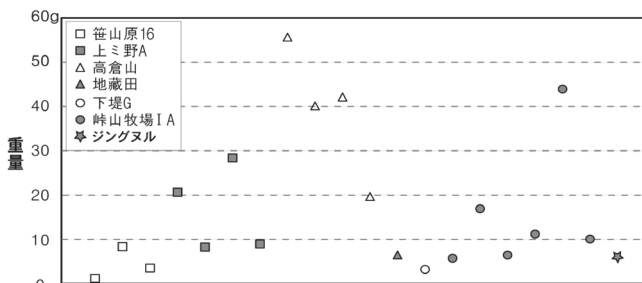
6 遺跡から出土した剥片尖頭器を各型式によって分類した結果は第 12 図のようになる。

第 1 表 剥片尖頭器の大きさ、重さと茎の比率

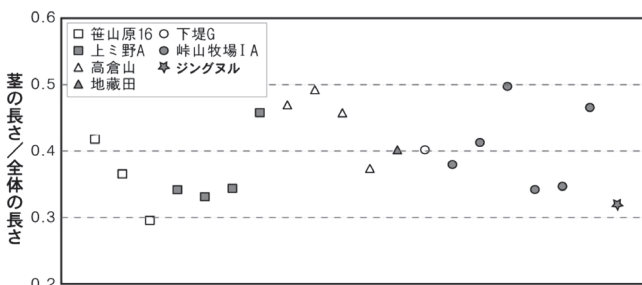
番号	遺跡名	長さ	幅	厚さ	重量	茎の長さ / 全体の長さ
1	笹山原 No.16	36.4	13.6	4.2	1.6	>0.42
2		64	26	5.5	8.6	0.37
3		50.4	50.4	6.7	3.9	0.3
4	上ミ野 A	84.3	25.6	10.3	20.9	0.34
5		60	18.7	7.3	8.6	0.33
6		60.8	26	9	9.1	0.46
7		109.8	37.6	9	28.7	0.35
8	高倉山	133.4	45.7	12.7	55.6	0.47
9		115.1	46.3	10	40.2	0.5
10		126	37.6	10.4	42.2	0.46
11		106.3	26.7	8.7	19.9	0.38
12	地蔵田	53.3	24.1	7.8	6.8	0.4
13	下堤 G	44.5	16.5	10.1	3.6	0.43
14	峠山牧場 I 遺跡 A 地区	69.5	19	7.5	6	0.38
15		88	29	10	17.1	0.41
16		50	26	9	6.7	0.5
17		93	25	8	11.4	0.34
18		77	26	9	10.3	0.47
19		129	35	15	43.9	0.35
20	ジングナル	31-80 -57.6	12-33 -20.3	4月12日 -7	2-21.4 (5.8-6.8)	0.19-0.58 -0.32



第9図 剥片尖頭器の大きさ分布図



第10図 剥片尖頭器の重量分布図



第11図 剥片尖頭器の茎の比率分布図

各型式の比率を見ると、ガ②型式 52.6%、ガ①型式 31.6%、ガ③型式 10.5%、ガ④型式 5.3%である。このようにガ①・ガ②型式の比率が高い点は、遺跡別、時期別であまり相違がみられないが、韓国のジングナル遺跡と垂楊介遺跡でもこのような傾向が見られる（第2表）。

一方、茎部の末端の形態を見ると、笹山原 No.16 遺跡、峠山牧場 I 遺跡 A 地区の場合は「角形」がほとんどで、「円形」や「尖頭形」は 1 点だけである。しかしながら上ミ野 A 遺跡と高倉山遺跡では、基部はもちろんのこと、基部の両側まで加工した「円形」と「尖頭形」が全部か、主流を占める。それに比べて、ジングナル遺跡は基部の両側だけを加工した「角形」の比率が優勢である（第2表）。おおよそ「円形」や「尖頭形」は打面をほとんど除去して製作するので「角形」よりもっと精巧な技術が要求される。しかし、このような型式は上ミ野 A 遺跡と高倉山遺跡でその比率が非常に高い

ので、大型、超大型の剥片尖頭器が相当な努力の産物だと思われる。

第2表 剥片尖頭器と茎の型式

番号	遺跡名	剥片尖頭器の型式	茎の型式
1	笹山原 No.16	ガ①	角形
2		ガ②	円形
3		ガ②	角形
4	上ミ野 A	ガ③	円形
5		ガ③	角形
6		ガ①	尖頭形
7		ガ②	円形
8	高倉山	ガ②	円形
9		ガ①	円形
10		ガ②	円形
11		ガ②	円形
12	地藏田	ガ①	円形
13	下堤 G	ガ②	角形
14	峠山牧場 I 遺跡 A 地区	ガ②	角形
15		ガ④	角形
16		ガ①	角形
17		ガ②	円形
18		ガ②	尖頭形
19		ガ①	角形
20	ジングナル	ガ①～④優勢	角形

#### 4. 年代

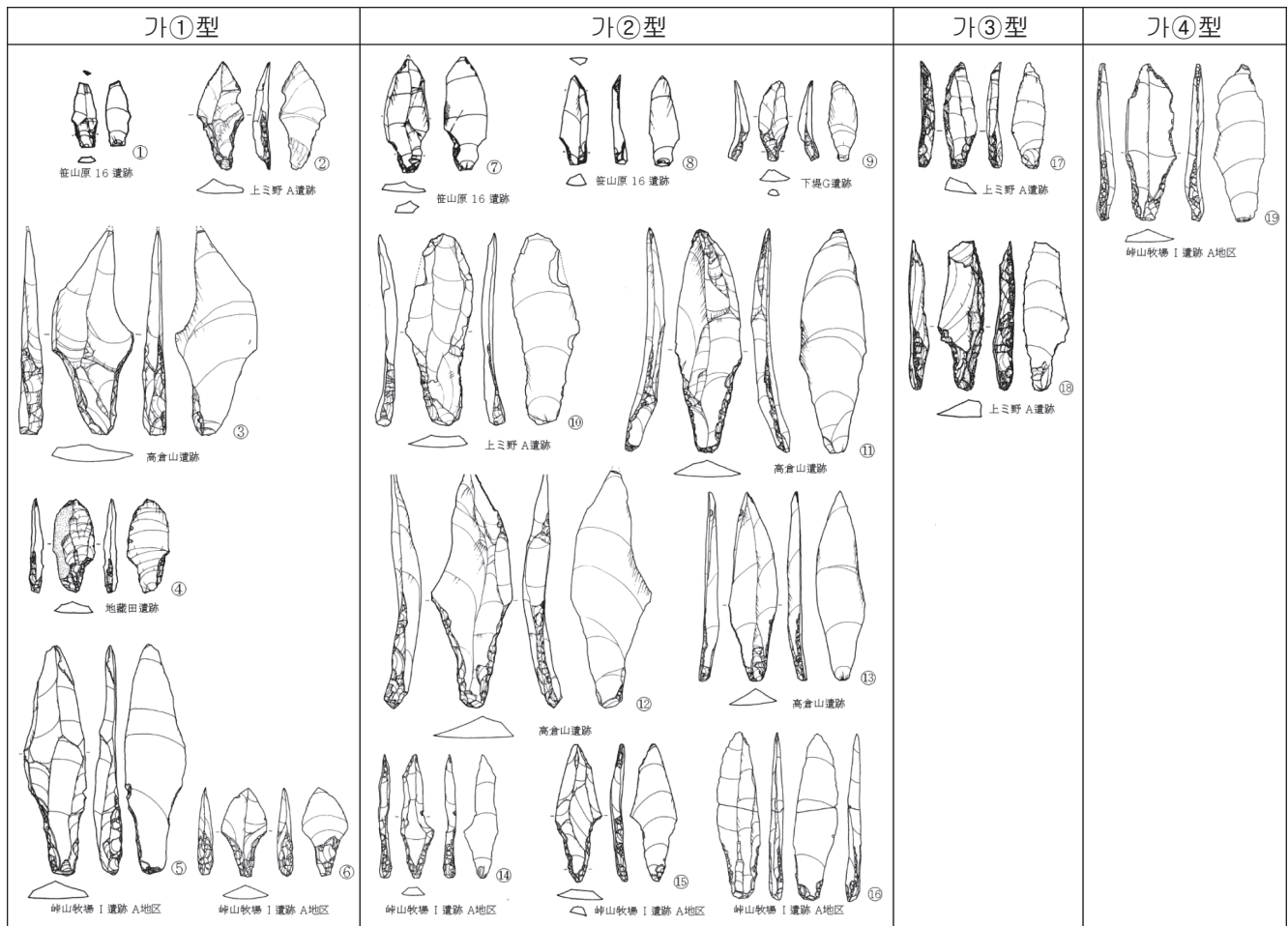
最後に、剥片尖頭器出土遺跡の絶対年代と相対年代について整理してみると第3表のようになる。

剥片尖頭器出土遺跡の前後関係は、おおよそ笹山原 No.16 遺跡 → 地藏田遺跡 → 下堤 G 遺跡 → 上ミ野 A 遺跡・高倉山遺跡 → 峠山牧場 I 遺跡 A 地区の順序となろう。この遺跡の年代は AT 降灰時期を基準としてみると、それよりかなり以前から出現して、細石刃石器群の前段階まで存在する（柳田 2013）。したがって、東北地方の剥片尖頭器は九州地方より先に、そしてもっと遅くまで存在したということがわ

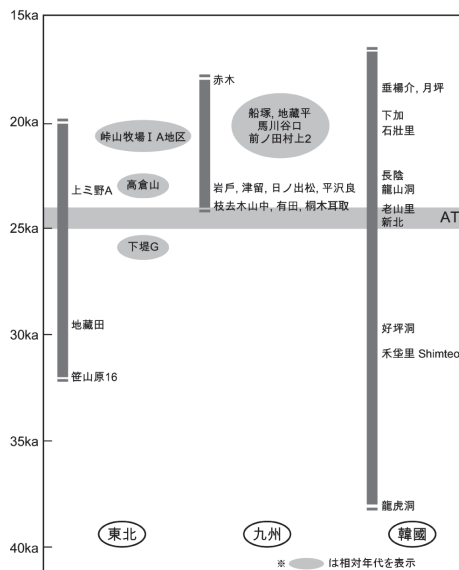
第3表 剥片尖頭器出土遺跡の絶対年代と相対年代

遺跡名	絶対年代と相対年代
① 笹山原 No.16	32,190 ± 140 BP., 30,510 ± 120 BP., 29,000 ± 100 BP., 28,920 ± 100 BP.
② 上ミ野 A	23,230 ± 80 BP
③ 高倉山	AT 火山灰上位、東山系石器群
④ 地藏田	29,720 ± 130 BP, 28,080 ± 120 BP.
⑤ 下堤 G	後期旧石器時代前半後半
⑥ 峠山牧場 I 遺跡 A 地区	後期旧石器時代後半前半
⑦ ジングナル	22,850 ± 350 BP, 17,310 ± 80 BP.





第12図 各遺跡の剥片尖頭器の型式分類



第13図 日本と韓国の剥片尖頭器出土遺跡の年代

かる。また、韓半島のスンベチルゲ(剥片尖頭器)の編年と比較してみると、最古の出現年代よりは遅く、最後の消滅年代よりも早い。相当な時期の間、存続年代が重なることがわかる(第13図)。

#### IV. おわりに

いままで韓国と日本学界はそれぞれにスンベチルゲと剥片尖頭器を含めるナイフ形石器の分類基準が厳格ではなかったり、お互いに相違があって違う型式に含めたり、同じ型式を異なる名称として呼んできた。したがって客観的な比較研究がしにくい環境にあったといえよう。この論文ではより厳密な基準で、茎部の両縁が凹んだ型式である筆者の'가'型を典型的スンベチルゲ(剥片尖頭器)として定義した。

本稿では、近年の東北日本地域で報告されたナイフ形石器、ペン先形ナイフ形石器と基部整形石器および基部整形剥片尖頭器の中で、'가'型で区分される典型的なスンベチ

ルゲ(剥片尖頭器)が含まれていることを確認できた。これらは素材の種類、二次加工の面や部位など、製作技法が韓半島のスンベチルゲ(剥片尖頭器)と共通しているが、もっと大きい個体も含まれており、茎部の比率が大きいという付随的な差異ももっている。

このように日本の東北地域には韓半島とそれほど変わらないスンベチルゲ(剥片尖頭器)が分布している。ところが、東北日本に隣接した新潟県樽口遺跡と長野県東裏遺跡、そして群馬県後田遺跡と千葉県四ツ塚遺跡でも‘ガ’型式に分類されるスンベチルゲ(剥片尖頭器)が出土した(木崎2005; 安蒜2013)。このようにスンベチルゲは九州地方だけではなく、東北地域と中部地域、関東地域を含む東日本にも存在して(第1図)、日本列島のかなり広い範囲に分布していたと推定される。それゆえ、今後の発掘を含む調査の進展により、東日本を含む日本列島でさらに多くの剥片尖頭器の発見が予想される。

一方、東北日本で報告された剥片尖頭器の年代が九州地方より相当早い時期だけではなく、非常に長い期間持続していた点も、近年の報告された絶対年代と相対年代を通して確認することができた。その最古年代は笹山原 No16 遺跡の 32,190 ± 140 BP であり、遅い年代は細石刃石器群の直前の段階に属する。このように新たに知られた分布範囲と存続年代から、これまで九州地方を中心として韓半島との関連性を推定されてきた剥片尖頭器の文化圏と伝播関係に対する研究者間の見解は様々な角度から再検討されるべきである。

もちろん、現在まで東日本で報告された剥片尖頭器の数量は九州地方や韓半島と比べるとまだ少ないし、基部加工および二側縁加工ナイフ形石器の数量はきわめて多い。このような様相はある意味で、韓半島との差異点として強調されたりもする。しかしながら、最近、任實下加遺跡、鎮安ジングヌル遺跡、丹陽垂楊介遺跡、大田龍山洞遺跡でスンベチルゲ(剥片尖頭器)とナイフ形石器の共伴が確認された。ここに長興新北遺跡で九州産の黒曜石で製作された石器が発見されたことを考えてみると、日本列島と韓半島の後期旧石器時代の人々人は予想より幅広い交流をしながらお互いの生活や文化を形成していったと推理される。今後、韓国と日本で報告された剥片尖頭器石器群に対する緻密な分析と相互的な比較研究がおこなわれれば、より進展した解釈が可能かと考えられる。

## 謝 辞

この論文を書くにあつて東北大学の柳田俊雄教授、阿子島香教授、鹿又喜隆准教授、佐野勝弘助教、洪惠媛博士課程、郡山女子大学會田容弘准教授、秋田市教育委員会文化振興室神田和彦研究員から助言をいただいた。記して深い感謝の言葉を伝えたい。そして、日本文献調査と図面作成に

朝鮮大学の金恩正研究員と金秀娥研究員に御手伝いただいた。

## 追 記

なお、李先生からは原文を韓国語でいただいたのでこの原稿を東北大学大学院文学研究科博士課程洪惠媛さんに日本語訳していただいた。旧石器の専門用語については当館の柳田が洪惠媛さんと議論を重ね、整理した。博物館紀要に投稿していただいた朝鮮大学李起吉教授(2012年度東北大学総合学術博物館客員教授)に重ねて感謝申し上げます。

## 引用文献

- 李起吉 2011a 「鎮安ジングヌル遺跡のスンベチルゲ研究：製作技法、型式、大きさを中心に」『韓国上古史学報』73, pp. 5-30.
- 李起吉 2011b 「旧石器時代の韓・日交流：新資料を中心として」『考古学ジャーナル』618, pp. 27-31.
- 李隆助・孔秀真 2002 「垂楊介遺跡の中茎利器に対する新しい研究」『韓国旧石器学報』6, pp.11-24.
- 張龍俊 2007 「韓半島와 日本 九州地域の 後期旧石器文化의 交流：スンベチルゲ(剥片尖頭器)を中心に」『韓国上古史学報』58, pp. 5-37.
- 張龍俊 2010 「日本ナイフ形石器の批判的検討：研究史と用語を中心に」『韓国考古学報』74, pp.118-144.
- 會田容弘 2011 「笹山原遺跡 No.16 第11次発掘調査」『東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』25, pp. 83-95, 東北日本の旧石器文化を語る会.
- 會田容弘 2012a 「2011(平成23)年度文化学科考古学発掘実習報告：会津若松市笹山原遺跡 No.16 第1次発掘調査」『文化学科(資格課程)報告集』14, pp. 36-67, 郡山女子大学短期大学部文化学科.
- 會田容弘, 2012b 「笹山原遺跡 No.16 第12次発掘調査」『東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』26, pp.79-88, 東北日本の旧石器文化を語る会.
- 安蒜政雄 2005 「剥片尖頭器、湧別技法、黒曜石：日本海を巡る旧石器時代の回廊」『考古学ジャーナル』527, pp. 3-4.
- 安蒜政雄 2013 『旧石器時代人の知恵』新日本出版社.
- 稲原昭嘉 1986 「剥片尖頭器に関する一考察」『旧石器考古学』32, pp. 33-54.
- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究：その編年と展開」『旧石器考古学』37, pp. 25-43.
- 木崎康弘 2005 「ナイフ形石器文化の展開と剥片尖頭器」『考古学ジャーナル』527, pp. 5-9.
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房.
- 佐野勝宏・鹿又喜隆・傳田惠隆・阿子島香 2011 「山形県舟形町高倉山遺跡第2次発掘調査」『東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』25, pp. 74-82, 東北日本の旧石器文化を語る会.
- 佐野勝宏・鹿又喜隆・洪惠媛・川口亮・張思燿・阿子島香・柳田俊雄 2012, 「山形県舟形町高倉山遺跡第3次発掘

- 調査」『東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』26, pp. 69-78, 東北日本の旧石器文化を語る会.
- 清水宗昭 1973「剥片尖頭器について」『古代文化』25 (11), pp. 375-382.
- 清水宗昭 2000「剥片尖頭器の系譜に関する予察」『九州旧石器』4, pp. 95-107.
- 清水宗昭 2010「剥片尖頭器とその文化」『垂楊介とその隣人たち』15, pp. 209-219.
- 高橋義介・菊池強一 1999『峠山牧場 I 遺跡 A 地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター.
- 羽石智治・會田容弘・須藤隆 2004『最上川流域の後期旧石器文化の研究 1: 上ミ野 A 遺跡第 1.2 次発掘調査報告書』東北大学大学院文学研究科考古学研究室.
- 松藤和人 1987「海を渡った旧石器: 剥片尖頭器」『花園史学』8, pp. 8-19, 花園大学史学会.
- 安田忠市・神田和彦 2011『地藏田遺跡: 旧石器時代編』秋田市教育委員会.
- 安田忠市・神田和彦・鹿又喜隆 2013『下堤 G 遺跡: 旧石器時代編』秋田市教育委員会.
- 柳田俊雄 2013「日本列島の東北地方と九州地方の後期旧石器時代石器群の比較研究」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No12, pp. 25-44.
- 吉留秀敏 2002「九州における剥片尖頭器の出現と展開」『九州旧石器』6, pp. 61-75.
- Denda, Y. Sakaki, T., Kanomata, Y., Akoshima, K. and Yanagida T. 2012. Studies of the Late Palaeolithic Culture in the Mogami River Basin vol. 2. The Kamino-A site Report of the third term excavation. *Bulletin of the Tohoku University Museum*. 11, pp. 1-194.
- Sano, K., Hong, H., Zhang, S., Yoshitaka, K., Kaoru, A. and Yanagida, T. 2013. Study on impact fractures observed on backed knives from the Takakurayama site, Yamagata. *Bulletin of the Tohoku University Museum*. 12, pp. 45-76.
- Matsufuji, K., 2004, Hakuhen-sentoki and the Neighbors-People with Stemmed Points Crossed Over the Tsushima Channel. *SUYANGGAE and Her neighbours*. 9, pp. 203-208.